一般成人のスポーツ文化観とそれに関連する要因

Sport culture consciousness of the general adult and its correlates

青木　邦男
Kunio Aoki

抄　録

一般成人673人（男性318人，女性355人）を分析対象者として，スポーツ文化観の現状およびそれに関連する要因を明らかにするために調査を実施し，関連要因の関連性について共分散構造分析を用いて分析した結果，以下のことが明らかになった．

１）一般成人のスポーツ文化観を構成する各質問項目の評定平均値は概ね「どちらとも言えない」と「そう思う」の間（3.18点－4.19点）にあり，消極的評価・肯定であると言える．

２）スポーツ文化は芸術と比較して，その評定平均値が3.18点－3.67点（「どちらとも言えない」と「そう思う」）の間にあり，スポーツ文化は芸術等のハイ・カルチャーと同等とは見なされず，価値序列的に低いと見なされている．

３）スポーツ文化観に関連する要因の関連性では，男女ともに，スポーツ実施状況（男性0.31,$p<0.05$；女性0.42, $p<0.001$），運動自己効力感（男性0.44, $p<0.001$；女性0.51, $p<0.001$）およびスポーツ関心度（男性0.55, $p<0.001$；女性0.43, $p<0.001$）がスポーツ価値観に対して有意な正の影響を及ぼしていた．そして，スポーツ価値観（男性0.89, $p<0.001$；女性0.91, $p<0.001$）がスポーツ文化観に対して強く有意な正の影響を及ぼしていた．また，男性では年齢がスポーツ文化観に対して弱い有意な負の影響を及ぼしていた．

したがって，スポーツ文化観を高めるためにはスポーツ実践や観戦等の関わりや関心の中でスポーツ価値観を高めることが重要である．

キーワード：スポーツ実施，運動自己効力感，スポーツ関心度，スポーツ価値観，共分散構造分析

Abstract

The purpose of this study was designed to clarify the sport culture consciousness of the general adults and the factors related to the sport culture consciousness of the general adults. The data was obtained through questionnaires distributed to 673 (318 males, 355 females) adults and multiple indicator model using Covariance Structure Analysis were applied to the data.

Main findings were as follows:

(1)The range of mean scores for each item related to the sport culture consciousness was 3.18 − 4.19（between “It can be said to be neither” and “I think so”）for both males and females. It follows from this that the general adults assume that sport is culture affirmatively but passively.

(2) In comparison with the art and sport culture, the range of mean scores for sport culture were 3.18 − 3.67（between “It can be said to be neither” and “I think so”）for both males and females. The general adults assume that sport culture is less than the art.

(3)In both sexes, “Participation of sport”（0.31 for men, 0.42 for women）, “Self-efficacy for exercise”(0.44 for men, 0.51 for women) and “Interest in sport”（0.55 for men, 0.43 for women）were significantly positively related to “Sport value consciousness”. And, the sport value consciousness（0.89 for men, 0.91 for women）strongly influences the sport culture consciousness in both sexes. In addition, “Age”（− 0.13 for men）very

weakly influences the sport culture consciousness in males.

The results of the analysis lead to the conclution that increasing the participation of sport, the interest in sport and the self-efficacy for exercise improve the sport value con-sciousness. And, Increasing the sport value consciousness improve sport culture conscious-ness.

Keyword：participation of sport, self-efficacy for exercise , interest in sport, sport value consciousness, covariance structure analysis

Ⅰ．はじめに

スポーツが固有の意味と価値を持つ文化であることは，多くの研究者によって規範的あるいは記述的に明らかにされてきた．菊（1999）と清水（1999）はそれまでのスポーツ文化研究の方法と成果をレビューし，機能主義，マルクス主義，カルチュラル・スタディーズ，歴史主義，文化人類学等の多用な理論的アプローチや実証的アプローチによって，文化としてのスポーツが読み解かれ，その文化的特性が明らかにされつつあることを詳論している．菊ほか（2006）は『現在スポーツのパースペクティブ』を編纂し，多様化を見せるスポーツ文化の現在をマスメディア，行政施策，政治経済やグロバリゼーション等の諸相の中で説き明かすとともにスポーツが身体文化でありポピュラーカルチャーである可能性を論述している．同様に，稲垣ほか（2009）は『近代スポーツのミッションは終わったか』を編纂し，その中でスポーツ史，文化人類学や思想・哲学の視点からスポーツ現象，すなわちスポーツ文化（論）を多様に論じている．また，佐伯（1984, 2006, 2013）は 1984 年に『スポーツ社会学の基礎理論』で文化現象としてのスポーツを社会学的に分析し，スポーツ文化とはスポーツ観，スポーツ行動様式およびスポーツ物的事物ならなる体系であると理論付けした後，一貫してスポーツ文化（論）について論究し，「スポーツは政治，経済，社会的にも文化的にも圧倒的な力を持ち」「ポピュラーカルチャーの中でヘゲモニーを握っている」（第 14 回秩父宮記念スポーツ医・科学賞功労賞記念講演「スポーツ文化論の思想と実践」）ことを力説している．こうした多くの先行研究をレビューすれば，スポーツが文化であることは学説として疑いの余地が無く，その文化的特性の探求と洗練化こそが課題となっていると言えよう．

他方，プロ・サッカーＪリーグ開幕で「サッカーは文化である」（1993 年 5 月 15 日）と宣言され，『Ｊリーグ百年構想』（1996 年 3 月）で地域におけるサッカーを核としたスポーツ文化の確立を目指すことが企図されて，一般市民にスポーツを文化と捉える視点や機運が膾炙した．同時に，人々がサッカーワールドカップや各種世界選手権やオリンピック等のビッグスポーツイベントを観戦し，熱狂・応援するライフスタイルが顕在化・一般化している（橋本，2002, 2010；杉本，1997；高橋，2011）．笹川スポーツ財団の『スポーツライフ・データ 2010』（2010）によれば，過去 1 年間に直接，スポーツの試合を観戦した割合（スポーツ観戦率）は 33.5％（男性 40.0％，女性 27.1％）で，一方，過去 1 年間にテレビによるスポーツ観戦を行った者は 94.5％（男性 95.9％，女性 93.0％）であり， 我が国成人に「観る」スポーツが浸透し愛好されている現状がうかがわれる．（橋本，2010；三井・篠田，2004；高橋，2011）．

こうした様々な理論的アプローチによる理論・学説や一般市民のスポーツ参加（する，見る，支える）の定着やメディアスポーツの影響の結果，今やスポーツが文化であることが『スポーツ基本法』（2011 年 6 月公布）や『スポーツ宣言日本』（日本体育協会・日本オリンピック委員会，2011 年 7 月）で宣言されている．また，中学校および高等学校学習指導要領の保健体育・体育理論では「文化としてのスポーツ」（文科省，2008）や「スポーツの歴史，文化的特性」（文科省，2009）が中･高校生の学習内容として明示されている．したがって，今やスポーツは文化であり，人々が学ぶべき教育内容となっていると言える．

しかしながら，一方で，2003 年と 2004 年の日本体育学会における体育原理専門部会のシンポジウムで「スポーツ文化の創造に向けて」が集中論議され，友添（2003）は「スポーツが声高に叫ばれる割にはスポーツが文化として存立しているといえる状況にはないのではないか」と問題提起をし，スポーツが自立した文化として存立していくために，スポーツ文化の存在論を探求・模索することが急務であると指摘して

いる．また，中央教育審議会スポーツ・青少年分科会に，今後のスポーツ振興等に関する事項を審議するために設置された『スポーツ振興に関する特別委員会』（平成19年－21年）において，第9回－14回会議で「スポーツを文化として定着されるために」が主要議題として取り上げられ，施設設備，指導者，スポーツマネジメントなどの視点から広汎に集中審議されている[注1)]．この広汎な審議の中で，委員から「これまでスポーツは文化としてとらえられてこなかった」「スポーツは文化であるとあまり意識されてこなかった」「スポーツ文化はあるが，その地位が低いのではないか」「日本ではスポーツの価値が低い」などに代表されるような意見が出され，スポーツが文化として市民権を得ていないあるいは文化的価値が低いことが指摘されている．同様に，スポーツが文化であると自明視することに懐疑的な言説あるいはスポーツ文化は軽視や偏見の中にあるという言説等が繰り返し展開されてきた（青木，2003；国士舘大学体育・スポーツ科学学会，2002；永島，2008；中村，2000；澤野，2005；清水，2011；ほか）．

したがって，スポーツが文化であることは法で宣言され，中学・高校生の学習内容となっているが，一般市民の間でスポーツが文化として認知され，その独自の意味や価値が適切に評価されていると現状を認識することについては多くの疑念や異議があると言わざるを得ない．

ところで，人々がスポーツを文化として認知し，どの程度の文化的価値を有すると評価しているかについて，代表的なサンプルを用いて調査した実証的な研究は数えるほどである．青木（2003）は高校生2461人を調査対象に，スポーツ文化の中核的な構成要素であるスポーツ観を調査して，高校生のスポーツ観（意義や価値）は肯定的であるものの消極的な評価であり，スポーツを文化の中でも価値的序列の低いものと見なす文化的偏見や軽視が現存していると結論づけている．一方，濱谷（2012）は20歳以上の男女2000人を調査対象に，スポーツの価値・効果を調査して，日本代表チーム・日本代表選手が国際大会で活躍する（優勝する，メダルを獲得する）ことが「日本人がノーベル賞を受賞する」や「日本の文化人が国際的に高い評価を得る」などよりも相対的に高い評価を得ていることを報告している．ただ，青木および濱谷の調査研究は調査対象者や調査項目が限定的であり，普遍化して一般成人のスポーツ文化観の実状を推測することはできない．一般市民がスポーツ文化の固有な文化特性を正当に認知し内面化することはスポーツの発展にとって極めて重要なことである．そのためには，社会一般において，スポーツが文化として認知されているのか否か，また文化と認められていても偏見や軽視の中にあるのか否かについて現状を把握することがまず必要である．そこで，一般成人を調査対象として，スポーツ文化観の現状およびそれに関連する要因を調査研究したので報告したい．

Ⅱ．方法

１．調査対象と調査方法

Ｙ県Ｙ市の20歳－74歳（前期高齢者）までの成人を調査母集団とした．Ｙ市の住民基本台帳より，20歳－74歳までの成人を無作為抽出によって1400人を抽出し，郵送法による質問紙調査を実施した．回収率を高めるために，調査期間中に協力依頼の葉書を１回送付した．その結果，調査対象者の52.8％にあたる739人から回答を得た．回収した調査票のうち，スポーツ文化観を測定する尺度のように多質問項目より構成されている尺度（項目）については，欠損値が１割以内までを有効回答とし，かつその他の単独質問項目に欠損値のない673人（男性318人，女性355人）を分析対象者とした．

２．調査期間

2012年１月10日から１月30日の３週間である．

３．調査内容と点数化

本研究では，スポーツ文化観の現状およびそれに関連する要因を明らかにすることを目的としている．そこで，基本属性，スポーツ文化観およびそれに関連する要因などを調べた．スポーツ文化観に関連する要因については，関連が予測される要因の多重指標モデルを作成して共分散構造分析で分析した．多重指標モデルは先行研究結果・知見をレビューして（阿部，2008；青木，2003；長ヶ原，2003；稲垣，2001；井上・亀井，1999；菊ほか，2006；南田・辻，2010；岡，2000；佐伯，2006；佐藤・吉見，2009；Weinberg and Gould, 2007；Weiss, 2004；ほか），図１のような６構成概念と20観測変数（項目）よりなる基礎モデル（多重指標モデル）を作成した．この基礎モデルは以下のように仮定したモデルである．(1) スポーツ文化はスポーツの観念体系，規範・技術体系およびスポーツ物的事物から構成されているので（佐伯，1984；青木，2003），その構成要素の中核であるスポーツ

観，特にスポーツに対する意味や価値の観念に焦点を絞った「スポーツの価値観」がスポーツ文化観に最も強く関連する．(2) そのスポーツの価値観に対しては，スポーツ意識・態度や行動に関連する主要な要因を精査・選択して（青木，2003,2005；長ヶ原，2003；Duda, 1998；日本スポーツ心理学会，2004；日本体育学会，2009；岡，2000；Ryba et al., 2010；Schinke and Hanrahan, 2009；杉原，2011；ほか），「スポーツ実施状況」「運動自己効力感」「運動に関する意思決定のバランス」「スポーツ関心度」「教育歴」および「年齢」が関連すると仮定した．スポーツ実施状況とスポーツ関心度はスポーツ価値観を形成する具体的な‘する’と‘見る’スポーツへの関わりの程度である．運動自己効力感と運動に関する意思決定のバランス（以下，意思決定のバランスと略す）は運動・スポーツ意識や行動（実施・継続・変容）を規定する要因で（青木，2005；Biddle and Nigg, 2000；岡，2000；Ryba et al.,2010；Schinke and Hanrahan, 2009），スポーツ価値観の形成に強く関連すると仮定した．また，これら4要因は相互に影響を及ぼすと考えられるので，4要因の間に共分散（相関）を仮定した．次に，学校体育として運動やスポーツ（文化）を学ぶ学校教育の履修年数（教育歴）および生きてきた時代の社会経済的状況・集合意識や文化状況・価値観を内面化し，当該個人のスポーツに対する意識や価値観を基礎付けている年齢がスポーツの価値観およびスポーツ文化観に関連すると仮定した．

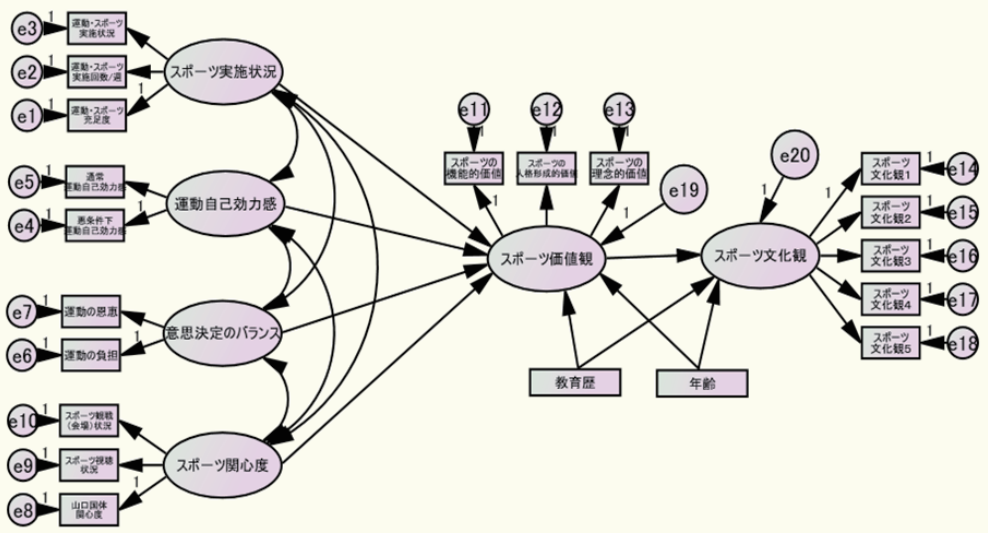

図1．一般市民のスポーツ文化観に関連する要因の多重指標モデル（基礎モデル）

したがって，調査内容としては基本的属性と上記基本モデルの構成概念に対する観測変数（項目）等を調べた．以下に，それらの具体的な調査内容と点数化を示す．

1）基本的属性：性別，年齢，職業，過去・現在の競技スポーツ活動（部活動）歴等を調べた

2）スポーツ文化観：青木（2003）のスポーツ観測定尺度をもとに，スポーツ文化（論）に関する先行研究・言説を精査して（阿部，2008；稲垣，2001；井上・亀山，1999；文部科学省，2010；中村，2000；佐伯，2006；ほか），7質問項目より構成される「スポーツ文化観測定尺度」を措定した．この暫定的尺度を用いて，一般成人500人（男性250人，女性250人）を調査対象としてパイロット調査を実施し因子分析の結果，1因子構造5質問項目よりなるスポーツ文化観測定尺度を作成して使用した（表1）．この尺度のクロンバックの α は0.852で信頼性があると評価される．各質問項目に対して，「1. とてもそう思う（5点）」から「5. まったくそう思わない（1点）」の5段階評定に回答させた．

3）スポーツの価値観：青木（2003）のスポーツ観測定尺度をもとに，スポーツの価値に関する先行研究・言説を精査して（Leonard, 1998；日本体育学会，2009；徳永，2004；ほか），20質問項目より構成され

る「スポーツの価値観測定尺度」を措定した．この暫定的尺度を用いて，一般成人500人（男性250人，女性250人）を調査対象としてパイロット調査を実施し因子分析の結果，「スポーツの機能的価値」「スポーツの人間形成的価値」「スポーツの理念的価値」の３因子14質問項目よりなるスポーツの価値観測定尺度を作成して使用した（資料1）．この尺度のスポーツの機能的価値，スポーツの人間形成的価値およびスポーツの理念的価値のクロンバックの α は0.827, 0.807, 0.784 で信頼性があると評価される．各質問項目に対して，「1.とてもそう思う（5点）」から「5.まったくそう思わない（1点）」の５段階評定に回答させ，各因子の合計点を算出して観測変数とした．

４）スポーツ実施状況：「運動・スポーツ実施状況」，「運動・スポーツ実施回数／週」および「運動・スポーツ充足度」を観測変数（項目）とした．運動・スポーツ実施状況については，運動行動の説明や予測に有効性と妥当性が実証されているトランスセオレティカル・モデルの中核的構成概念である運動行動変容の５ステージを使用した（Marcus et al., 1992）．「1.私は現在，運動していない．これから先（6ヶ月以内）もするつもりはない（1点）」から「5.私は現在，定期的に運動している．また，長期（6ヶ月以上）にわたって継続している（5点）」の５選択肢に回答させた．運動・スポーツ実施回数／週は１週間当たりの運動実施回数を調べた．運動・スポーツ充足度は現在の運動・スポーツ実施程度が健康・体力の保持・増進に充足しているかについて，「1.十分である（5点）」から「5.不十分である（1点）」の５段階評定に回答させた．

５）運動自己効力感：青木（2005）が作成した「運動自己効力感測定尺度」12質問項目を借用した．使用に当たっては，一般成人500人（男性250人，女性250人）を調査対象としてパイロット調査を実施し因子分析の結果，「悪条件下運動自己効力感」と「通常運動自己効力感」の２因子11質問項目に収束したので，この２因子11質問項目を使用した（資料2）．この尺度の悪条件下運動自己効力感と通常運動自己効力感のクロンバックの α は0.918と0.887で信頼性があると評価した．各質問項目に対して，「1.非常に自信がある（5点）」から「5.まったく自信はない（1点）」の５段階評定に回答させ，各因子の合計点を算出して観測変数とした．

６）意思決定にバランス：岡ほか（2003）が作成し，その信頼性と妥当性が確かめられている「運動に関する意思決定のバランス尺度」20質問項目を借用した．各質問項目に対して，「1.全くそう思わない（1点）」から「5.かなりそう思う（5点）」の５段階評定に回答させた．「運動の恩恵」と「運動の負担」について，それぞれ合計点を算出し，観測変数とした．

７）スポーツ関心度：「スポーツ観戦（会場）状況」「スポーツ視聴状況」および「山口国体関心度」を観測変数とした．スポーツ観戦（会場）状況は，過去１年間において試合会場に出向いてのスポーツ観戦の回数を調べた．スポーツ視聴状況は過去１年間においてテレビ等でのスポーツ視聴の程度について，「1.ほとんど毎日（4点）」から「4.まったくなし（1点）」の４段階評定に回答させた．山口国体関心度は平成23年度に山口県で開催された国民体育大会への関心の程度について，「1.非常に関心があった（4点）」から「4.ほとんど関心がなかった（1点）」の４段階評定に回答を求めた．

８）その他の観測変数：教育歴と年齢を観測変数とした．教育歴は教育を受けた最終学歴までの年数について，「1.6年以下（1点）」から「6.17年以上（6点）」の６選択肢に回答を求めた．年齢は満年齢を調べた．

４．分析方法

スポーツ文化観の性別および年齢区分別の平均点の比較は性×年齢区分別（２元配置）の分散分析とBonferroni の多重比較を行った．次に，構成概念に対する各観測変数の妥当性，観測変数と構成概念および構成概念間の因果関係を明らかにするために，多重指標モデルによる共分散構造分析を実施した．分析は20観測変数のうち，11観測変数に有意な性差があったので男女別に実施した．共分散構造分析にはSPSS15.0J for Windows, Amos 18 を使用し，解法は最尤法を用いた．また，有意水準は5%未満とした．

なお，回収した調査票のうち，スポーツ文化観を測定する尺度のように多質問項目より構成されている尺度（項目）については，欠損値が１割以内までを有効回答としたので，欠損値には当該尺度の他構成質問項目の平均値を当てた．

５．倫理的配慮について

調査にあっては調査依頼の文章に調査の趣旨・目的，調査対象者の抽出方法・調査対象者数，調査データの集計方法・公表などについて記載し，無記名の調査であることを明記したうえで協力をお願いした．また，本調査研究は大学生命倫理委員会の承認のもとに実施した．

Ⅲ．結果

1．一般成人のスポーツ文化観の現状

スポーツ文化観に関する質問項目の性別と年齢区分別の平均値の分散分析結果を表１に示す.

表１．スポーツ文化観に関する質問項目の性別と年齢区分別の平均値(標準偏差)および分散分析結果

質問項目		年齢区分 1.20−29歳	2.30−39歳	3.40−49歳	4.50−59歳	5.60歳−	全年齢平均	分散分析（性別×年齢区分別）
	男	42	43	43	57	133		
	女	29	43	76	63	144		
1.スポーツは日常生活に必要な教養である	男	3.81(0.94)	3.56(0.98)	4.02(0.67)	3.47(0.85)	3.52(0.89)	3.62(0.89)	性差：F=1.113, n.s.
	女	3.79(0.94)	3.77(0.95)	3.80(0.89)	3.67(0.69)	3.74(0.79)	3.75(0.83)	年齢区分差：F=3.144, p<0.05
								多重比較：有意な2群なし
								性別×年齢区分別：F=1.583, n.s.
2.スポーツは芸術と同じだけの価値がある	男	3.19(1.17)	3.63(1.09)	3.56(1.03)	3.18(0.85)	3.19(0.95)	3.30(1.01)	性差：F=3.562, n.s.
	女	3.28(1.09)	3.67(0.75)	3.63(0.95)	3.50(0.84)	3.49(0.85)	3.53(0.88)	年齢区分差：F=3.212, p<0.05
								多重比較：有意な2群なし
								性別×年齢区分別：F=0.624, n.s.
3.スポーツは素晴らしい文化である	男	3.88(0.99)	4.19(0.73)	4.12(0.63)	3.80(0.78)	3.74(0.92)	3.88(0.86)	性差：F=2.587, n.s.
	女	4.07(0.75)	4.09(0.65)	4.12(0.82)	3.98(0.61)	4.01(0.72)	4.04(0.72)	年齢区分差：F=3.338, p<0.01
								多重比較：有意な2群なし
								性別×年齢区分別：F=1.196, n.s
4.スポーツは人間らしく生きていくために必要な活動である	男	3.48(1.15)	3.58(0.85)	3.53(0.70)	3.39(0.82)	3.56(0.84)	3.52(0.86)	性差：F=0.901, n.s.
	女	3.52(0.78)	3.42(0.85)	3.67(0.90)	3.57(0.76)	3.71(0.76)	3.62(0.81)	年齢区分差：F=1.084, n.s.
								性別×年齢区分別：F=0.695, n.s
5.スポーツにおける技術や行動様式には文化特性がある	男	3.95(0.88)	4.02(0.83)	3.81(0.55)	3.58(0.82)	3.76(0.68)	3.80(0.75)	性差：F=2.356, n.s.
	女	3.93(0.88)	3.98(0.64)	3.89(0.81)	3.89(0.67)	3.92(0.64)	3.92(0.70)	年齢区分差：F=1.965, n.s.
								性別×年齢区分別：F=1031, n.s
合計	男	18.31(4.27)	18.98(3.39)	19.10(2.48)	17.40(3.31)	17.68(3.24)	18.09(3.38)	性差：F=3.554, n.s.
	女	18.59(3.19)	18.93(2.83)	19.11(3.17)	18.53(2.51)	18.86(2.83)	18.84(2.88)	年齢区分差：F=2.697, p<0.05
								多重比較：有意な2群なし
								性別×年齢区分別：F=1.240, n.s.

注 1）平均値（標準偏差）
注 2）有意な 2 群なしは F 検定では有意差が見出されたが，多重比較では有意差を示す年齢区分の組み合わせ(2 群)はなかった。

個別質問項目の性別・年齢区分別の平均値については男女ともに概ね，評定「3. どちらとも言えない」と「4. そう思う」の間（3.18 − 4.19）にあった．また，合計点の性別･年齢区分別の平均点も男女ともに概ね，評定「3. どちらとも言えない」と「4. そう思う」の間（17.40 − 19.11）にあった．したがって，一般成人は男女ともにスポーツを文化として一応肯定的に評価しているが，その評価は消極的評価と言える.

2 要因分散分析（性×年齢区分）と Bonferroni の多重比較の結果，“スポーツは日常生活に必要な教養である”，“スポーツは芸術と同じだけの価値がある”および“スポーツは素晴らしい文化である”の 3 質問項目で年齢区分別に有意差が見出された．ただ，これら 3 質問項目について，各多重比較の結果，有意差を示す年齢区分の組み合わせはなかった．　また，合計点では有意な性差はなく，年齢区分別に有意差は見出されたものの，多重比較の結果は有意差を示す年齢区分の組み合わせはなかった.

2．スポーツ文化観に関連する要因

本研究ではスポーツ文化観に関連する要因を明らかにするために，関連が予測される要因の多重指標モデル（基礎モデル）を作成して共分散構造分析で分析した．仮説として作成した基礎モデルにデータをあてはめて，有意水準 5% 未満で有意でなかった観測変数およびパスを除き，併せて修正指数を参考にしてパスを改良した結果，図 2,3 のような男女別の多重指標モデルが最も妥当性が高いモデルと評価して採用した．この多重指標モデルは，データとの適合性を示す指標である GFI（Goodness of Fit Index）と AGFI（Adjusted GFI）および RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）が男性で GFI=0.904（AGFI=0.857）と RMSEA=0.068, 女性で GFI=0.927（AGFI=0.889）と RMSEA=0.057　であった．必ずしも十分に高い適合性を示すものではないが，モデルを採用する基準（豊田，1998：山本・小野寺，1999）を満たすものであり妥当なモデルであると評価した.

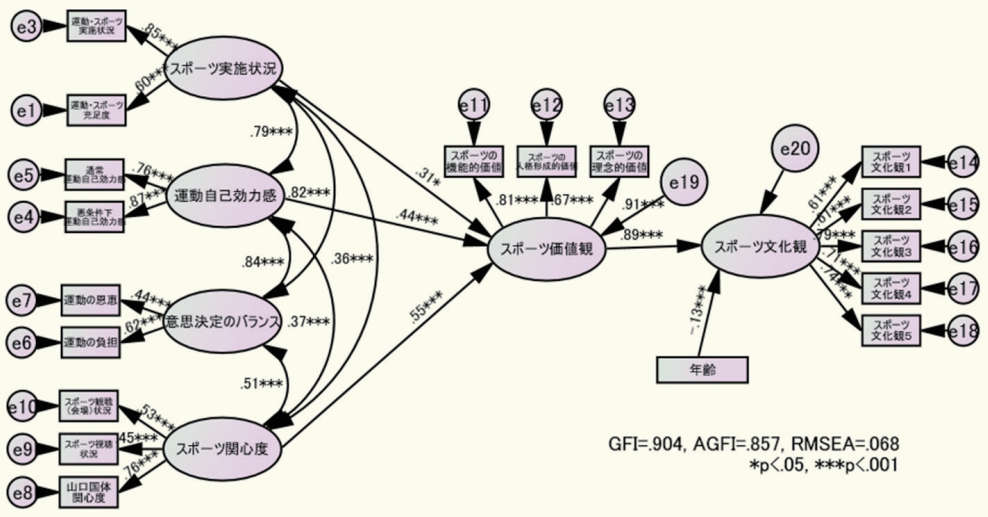

図2．一般男性市民のスポーツ文化観に関連する要因の多重指標モデル（標準化推定値）

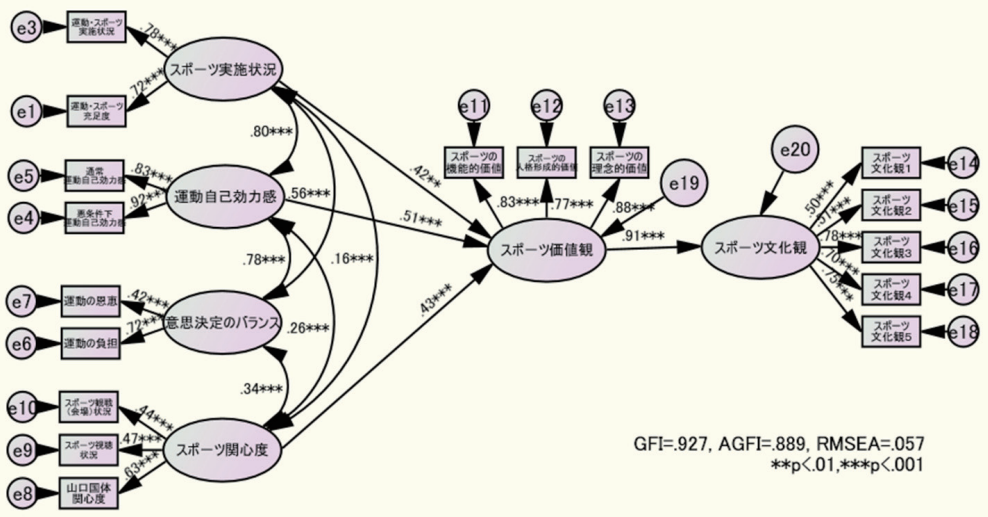

図3．一般女性市民のスポーツ文化観に関連する要因の多重指標モデル（標準化推定値）

まず，6構成概念から各観測変数へのパスについては，スポーツ文化観からスポーツ文化観１－５（“スポーツは日常生活に必要な教養である”－“スポーツにおける技術や行動様式には文化特性がある”）へのパス係数は男性で0.61（p<0.001）－0.74（p<0.001），女性で0.50（p<0.001）－0.75（p<0.001）であった．スポーツ価値観からスポーツの機能的価値，スポーツの人間形成的価値およびスポーツの理念的価値へのパス係数は男性で0.81（p<0.001），0.67（p<0.001）および0.91（p<0.001），女性で0.83（p<0.001），0.77（p<0.001）および0.88（p<0.001）であった．スポーツ実施状況から運動・スポーツ実施状況と運動・スポーツ充足度へのパス係数は男性で0.85（p<0.001）と0.60（p<0.001），女性で0.78（p<0.001）と0.72（p<0.001）であった．運動自己効力感から通常運動自己効力感と悪条件下運動自己効力感へのパス係数は男性で0.76（p<0.001）と0.87（p<0.001），女性で0.83（p<0.001）と0.92（p<0.001）であった．意思決定のバランスから運動の恩恵と運動の負担へのパス係数は男性で0.44（p<0.001）と0.62（p<0.001），女性で0.42（p<0.001）

と 0.72（p<0.001）であった．そして，スポーツ関心度からスポーツ観戦（会場）状況，スポーツ視聴状況および山口国体関心度へのパス係数は男性で 0.53（p<0.001），0.45（p<0.001）および 0.76（p<0.001），女性で 0.44（p<0.001），0.47（p<0.001）および 0.63（p<0.001）であった．各構成概念から各観測変数へのパスは有意なパス係数を示し，比較的に高い値である．したがって，構成概念と観測変数との対応は適切なものと評価した．

次に，スポーツ文化観に関連する要因を見ると，男女ともにスポーツ実施状況，運動自己効力感，意思決定のバランスおよびスポーツ関心度が相互に有意な正の相関（男性で r=0.36 － r=0.84, すべて p<0.001；女性で r=0.16 － r=0.80, すべて p<0.001）を示しながら，スポーツ実施状況（男性 0.31, p<0.05；女性 0.42, p<0.01）と運動自己効力感（男性 0.44, p<0.001；女性 0.51, p<0.001）およびスポーツ関心度（男性 0.55, p<0.001；女性 0.43, p<0.001）がスポーツ価値観に対して有意な正のパス係数を示した．次に，男女ともにスポーツ価値観（男性 0.89, p<0.001；女性 0.91, p<0.001）がスポーツ文化観に対して有意な強いパス係数を示した．そして，男性では年齢（-0.13）がスポーツ文化観に対して有意な負のパス係数を示した．したがって，男女ともに，スポーツ実施状況，運動自己効力感およびスポーツ関心度が高いほど，スポーツ価値観を高め，そしてスポーツ価値観が高いほど，スポーツ文化観を高めていた．また，男性では極めて弱い影響ではあるが，加齢がスポーツ文化観を低くめていた．

Ⅳ．考察

１．一般成人のスポーツ文化観の現状について

一般成人のスポーツ文化観の現状はスポーツ文化観測定尺度の合計点および個別質問の平均得点から要約すると，5 段階評定のうちで概ね「3. どちらとも言えない」と「4. そう思う」の間にあり，一般成人は男女ともにスポーツを文化として消極的な肯定で認識していると言えよう．また，スポーツ文化の価値的序列や比較に関して直接に質問した項目に注目してみると，“スポーツは素晴らしい文化である”は性別・年齢区分別の評定平均が 3.74 － 4.19 の間で，概ね消極的肯定から肯定的な評価であるが「5. 強くそう思う」の積極的評価ではない．スポーツが文化として少なからず肯定的に認知されているが確固たるものとは言えないと考えられる．一方，“スポーツは芸術と同じだけの価値がある”では性別・年齢区分別の評定平均が 3.18 － 3.67 の間で，概ね消極的肯定であり，スポーツ文化は芸術等のハイ・カルチャーより価値序列的に低いと見なされている．こうした調査結果はスポーツ科学の研究者や有識者によって指摘されてきたように（青木，2003；永島，2008; 中村，2000；澤野，2005；清水，2011；友添，2003），スポーツが文化として市民権を十分に得ていなく，また文化としての偏見や軽視の中にあることを実証している．スポーツ文化が文化的偏見や軽視の中にあるとすれば，それは文化特性としてのスポーツの意味や価値が正当に評価されていないことが推測される．スポーツ価値観を構成する因子「スポーツの機能的価値」「スポーツの人間形成的価値」および「スポーツの理念的価値」の性別の平均値はそれぞれ男性で 3.98, 3.34 と 3.57, 女性で 4.12, 3.66 と 3.76 である．“スポーツは仲間作りや出会いの場を提供する”や“スポーツは健康や体力づくりに欠かせない”などのスポーツの機能的価値では概ね「4. そう思う」で肯定的であるが，“スポーツは何事にもやり抜く根性を養う”や“スポーツは自主性や自発性を養う”などのスポーツの人間形成的価値と“スポーツは日常生活での大きな生きがいとなる”や“スポーツは世界平和に貢献する”などのスポーツの理念的価値はいずれも，概ね「3. どちらでもない」と「4. そう思う」の間であり消極的肯定と解釈される．したがって，スポーツ文化の内実であるスポーツ価値観が機能的価値を除いて消極的肯定であることが，スポーツ文化（観）を文化的序列の低いものと評価させている一因であると推察される．

次に，2 要因分散分析と Bonferroni の多重比較の結果，年齢区分別で 3 つの個別質問項目で有意差が見出されたが，その多重比較では有意差を示す 2 群の組み合わせは見出せなかった．同様に，総合としてのスポーツ文化観（合計点）では性差で有意差はなく，年齢区分別では有意差が見出されたものの多重比較では有意差を示す年齢区分の組み合わせはなかった．すなわち，一般成人のスポーツ文化観は性別による修飾は受けず，また年齢（区分）による影響も限定的で弱いと言えよう．文化が広義の学習で内面化された意識・観念であると考えれば（池井・仲村，1998；大坊，1990），スポーツ文化観はスポーツの文化的特性やイメージの現在形の認識であると考えられる．とりわけ，見るスポーツの隆盛によって，マスメディア（メディアスポーツ）がスポーツに係わる言説を日々流布し影響を与えている現在では，人々は認知の性差や年齢区

分差の影響を上回って，現在流布されているスポーツに係わる意味や価値などをスポーツ文化観として内面化することとなる．したがって，本調査結果のように，一般成人のスポーツ文化観は性差の影響を受けず，限定的で弱い年齢区分差の影響を受ける結果となったと推察される（箱田，2011）．

２．スポーツ文化観に関連する要因について

スポーツ文化観を強く規定していたのは男女ともにスポーツ価値観であった．スポーツ文化を構成する要素の中で，中核的な要素であるスポーツ観は人々が抱くスポーツに関する意味や価値の観念であるので（井上・菊，2012；佐伯，1984），スポーツ価値観がスポーツ文化観を強く規定することは論理的に推論でき首肯できる結果である．スポーツ価値観の観測変数はスポーツの機能的価値，スポーツの人間形成的価値およびスポーツの理念的価値の３因子（変数）であるので，スポーツの機能的，人間形成的および理念的価値が具体的なスポーツの価値としてスポーツ文化観を規定すると言える．したがって，人々のスポーツ文化観を高めるにはスポーツの機能的，人間形成的および理念的価値をさらに高めるとともに敷衍していく努力が求められる．なお，男性では年齢がスポーツ文化観を弱く規定していた．加齢とともにスポーツ文化観が低くなる結果であった．これは男性が女性に比べて，‘見る’および‘する’スポーツに関与する割合が高く（笹川スポーツ財団，2010），かつ高齢者の方が若年齢の方に比べて保守的な意識や観念が強い傾向があるために（下仲，2012），男性のみに年齢がスポーツ文化観に弱いながら負の影響を及ぼしていると考えられる．ただ，年齢は様々な基本属性を規定して社会現象に影響を与える特性であるので，年齢がスポーツ文化観を規定する規定力や因果関連の説明は理論的仮説に基づく調査研究の累積を集約して提示することが必要である．今後の研究課題としたい．

次に，スポーツ価値観に対して，男女ともにスポーツ実施状況，運動自己効力感およびスポーツ関心度が有意な正の影響を及ぼしていた．すなわち，スポーツ実施状況，運動自己効力感およびスポーツ関心度が高いほどスポーツ価値観を高めていた．スポーツ実施状況はスポーツを実践する，あるいはその充足感の程度であるので，この程度が高いほどスポーツへの社会化がなされ，スポーツの内包する特性（意味や価値や行動様式など）が感得され内面化されることになる．あるいは，スポーツの実施・参加に意義や価値を見出すからスポーツを実施・継続し充足感を持つと推察される．こうした理由により，スポーツ実施状況がスポーツ価値観に影響すると考えられる．運動自己効力感はある運動・スポーツ行動を起こす前にその当人が感じる遂行可能性や実現可能性に関する知識や考え方である（バンデューラ，1997；坂野・前田，2002）．そして，運動自己効力感は運動・スポーツの実施や継続を促し，また運動アドヒレンスを促進する要因であり，運動・スポーツ行動を規定する主要な決定因である（青木，2005；岡，2000；Reed, 2001；Weinberg and Gould, 2007）．本研究結果においても，運動自己効力感が強い成人ほど，ポーツ実施状況が高く，また意思決定のバランスにおける‘運動の恩恵’を強く感じている（図2, 3）．したがって，運動自己効力感は運動・スポーツ行動を開始させ継続させる意識・知識であり，それは運動・スポーツ行動に係わる積極的，肯定的意識に基づくと推察されるので，自ずからスポーツ価値観を規定すると考えられる．また，運動自己効力感は運動・スポーツ行動に係わって，①成功体験（遂行行動の達成），②代理的体験，③言語的説得および④情動的喚起によって育てられる（バンデューラ，1997；坂野・前田，2002）．とりわけ，成功体験（遂行行動の達成）が運動自己効力感の育成に重要である．したがって，人々が運動・スポーツ行動の中で，適切な成功体験・達成感を得ることがスポーツ価値観の内面化に重要であると言えよう．

次に，スポーツ関心度は日々のスポーツ視聴状況やビッグ・スポーツイベントである国民体育大会への関心の程度であるので，この関心度が高いほどスポーツの持つ特性に魅了され意味や価値を見出していると考えられる．すなわち，スポーツ観戦・視聴や関心の高さはスポーツに対して濃淡はあっても意義や価値を認めている結果であるので，このことはスポーツ価値観を規定することになる また，メディアスポーツの研究において，スポーツ・マスメディアがスポーツに係わる人間行動や価値観などに強い影響を及ぼすことが明らかにされているように（橋本，2002；神原，2001；大坊ほか，1990），スポーツ・マスメディア（メディアスポーツ）の言説はスポーツの視聴行動や関心度に強く影響を及ぼしていると言える．したがって，スポーツ・マスメディア（メディアスポーツ）がスポーツ価値観およびスポーツ文化観に及ぼす社会的影響力やその規定・関連要因を精緻に明らかにして，スポーツ価値観やスポーツ文化観を高めるための具体的な方策や提言を示す研究が求められる（阿部，2008；橋本，

2002；神原，2001）．

ところで，スポーツ実施状況，運動自己効力感，意思決定のバランスおよびスポーツ関心度は相互に有意な関連を示した．したがって，この4項目（構成概念）は相互に影響を及ぼし規定しながら，スポーツ価値観に対する相対的な影響力と相互干渉の結果，スポーツ実施状況，運動自己効力感，およびスポーツ関心度がスポーツ価値観に影響したと考えられる．特に，スポーツ実施状況，運動自己効力感および意思決定のバランスは相互に強い関連を示しているが，これら3つの項目は運動行動変容や運動アドヒレンスの説明や予測で有用性が高いトランスセオレティカル・モデル（Transtheoretical Model, 以下TTMと略す）の構成要素（運動行動変容のステージ，意思決定のバランスおよびセルフ・エフィカシー）であり，これら3項目が相互に強く関連することはTTMに関する多くの実証的研究で報告されている（Biddle and Mutrie, 2008；岡，2000；Reed, 2001）．したがって，本研究においてもそうした研究結果を追認したこととなる．運動の恩恵を増やし運動の負担を減らし（意思決定のバランス）かつ運動自己効力感を強化させ維持させることがスポーツ行動の開始と継続を促し，スポーツ価値観を内面化させることになると言えよう．

最後に，本研究では仮説として作成した基礎モデルにデータをあてはめて，図2,3のような男女別の多重指標モデルが最も妥当性が高いモデルであると判断して採用した．しかし，適合度指標でみる限りさらに適応度が高く妥当なモデルを構築できるような要因選択の可能性がある．今後の研究課題としたい．

V．まとめ

一般成人673人（男性318人，女性355人）を分析対象者として，スポーツ文化観の現状およびそれに関連する要因を調査し，要因の関連性を共分散構造分析を用いて分析した結果，以下のことが明らかになった．

1) 一般成人のスポーツ文化観については，その評価が概ね「どちらとも言えない」と「そう思う」の間にあり，消極的評価・肯定と言える．

2) スポーツ文化は芸術等のハイ・カルチャーと比較して，同等とは見なされず，価値序列的に低いと見なされている．

3) スポーツ文化観に関連する要因の関連性では，男女ともに，スポーツ実施状況，運動自己効力感およびスポーツ関心度が高いほど，スポーツ価値観を高め，そしてスポーツ価値観が高いほど，スポーツ文化観を高めていた．また，男性では極めて弱い影響ではあるが，加齢がスポーツ文化観を低くめていた．

スポーツ文化観を高めるためにはその内実であると考えられるスポーツの意義や価値，すなわちスポーツ価値観を高めることが極めて重要である．特に，スポーツ価値観の構成要素である「スポーツの人格形成的価値」および「スポーツの理念的価値」を高め，敷衍化していくことが求められる．また，スポーツ視聴はメディアスポーツの影響として，人々のスポーツ意識・態度・価値観等の内面化に強く働きかけると推察される．したがって，メディアスポーツの質が人々のスポーツ価値観および文化観を影響・規定することになる．スポーツ文化（論）を洗練し高めるような，理論的で実証的根拠のあるメディアスポーツ研究の伸展と成果が求められる．

注

注1）平成19年3月に中央教育審議会スポーツ・青少年分科会に，今後のスポーツ振興等に関する事項を審議するため，スポーツ振興に関する特別委員会が設置された．特別委員会では平成19年から21年の間に19回の会議が開催された．第7回会議（平成20年3月）で「スポーツは人類の智恵が集まって発展してきた文化であるにもかかわらず，文化としては振興されてきていない．…スポーツは文化として意識されることがなかった．この委員会においてスポーツを文化として定着させるという観点から議論を深めることとしてはどうか」の発議等により，第8回会議での「有識者からのヒアリング　日本サッカー協会　田嶋幸三専務理事『スポーツを文化にするために－JFA2005年宣言実現への取組－』」を経て，第9回から第14回まで「スポーツを文化として定着させるために」が主要議題として集中審議されている．

資料1. スポーツの価値観の質問項目と因子分析結果

【第1因子：スポーツの機能的価値】	α＝827	
スポーツは仲間作りや出会いの場を提供する		0.814
スポーツは喜びと楽しさを生み出す		0.692
スポーツは健康や体力作りに欠かせない		0.617
スポーツは気分転換やストレスの発散になる		0.594
スポーツは目標達成や克服による達成感の喜びを生み出す		0.588
スポーツは感動を与える		0.436
【第２因子：スポーツの人格形成的価値】	α＝807	
スポーツは何事にもやり抜く根性を養う		0.792
スポーツは決断力を養う		0.670
スポーツはリーダーシップ能力を養う		0.589
スポーツは自主性や自発性を養う		0.528
【第３因子：スポーツの理念的価値】	α＝0.784	
スポーツは社会的に評価の高い活動である		0.734
スポーツは日常生活での大きな生きがいとなる		0.553
スポーツは世界平和に貢献する		0.484
スポーツは理念的な価値を持つ		0.431

資料2. 運動自己効力感の質問項目と因子分析結果

【第1因子：悪条件下運動自己効力感】	α＝918	
時間がないときでも運動する自信がある		0.960
雨が降っている日でも運動する自信がある		0.857
疲れていても運動する自信がある		0.831
気分がすぐれない時でも運動する自信がある		0.786
これからもずっと運動を続ける自信がある		0.539
【第２因子：通常運動自己効力感】	α＝887	
楽しく運動ができる自信がある		0.890
たいていの運動を行える体力がある		0.821
今まで行ったことのない運動でも修得できる身体能力がある		0.747
無理なく運動する自信がある		0.696
疲労をためずに運動をする自信がある		0.568
日常生活の一部として運動する自信がある		0.458

文献

阿部　潔（2008）スポーツの魅惑とメディアの誘惑：身体／国家のカルチュラル・スタディーズ．世界思想社：京都.

青木邦男（2003）高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因．体育学研究 ,48(2):207-223.

青木邦男（2005）在宅高齢者の運動行動のステージと関連する要因．体育学研究 , 50(1):13-26.

アルバート・バンデューラ編（1997）激動社会の中の自己効力感．本明・野口監訳 , 金子書房：東京 , pp.1-41.

Biddle,S.J.H. and Nigg,C.R.（2000）Theory of exercise behavior.Int. J.Sport Psychol.,31:290-304.

Biddle, S.J.H. and Mutrie, N.（2008）Psychology of physical activity:Determinants, Well-being and interventions. Routledg:London and New York,pp.33-346.

長ヶ原　誠（2003）中高齢者の身体活動参加の研究動向．体育学研究 , 48:245-268.

大坊郁夫・安藤清志・池田謙一編（1990）社会心理学パースペクティブ３集団から社会へ . 誠信書房：東京 , pp.263-288.

Duda, J.L.（Ed.）（1998）Advances in sport and exercise psychology measurement. Fitness Information Technology, Inc.：Morgantown, pp.325-392.

箱田裕司編（2011）認知の個人差．北大路書房：京都.

濱谷健史（2012）改めて見直すべき「スポーツの価値」－スポーツの活性化に向けて求められること－. NRI パブリックマネジメントレビュー 112:1-6.

橋本純一編（2002）現代メディアスポーツ論．世界思想社：京都.

橋本純一編（2010）スポーツ観戦学：熱狂のステージの構造と意味．世界思想社：京都.
池井　望・仲村祥一編（1998）社会意識論を学ぶ人のために．世界思想社：京都 , pp.2-75.
稲田正浩(2001)スポーツ文化の脱構築．叢文社:東京.
稲垣正浩・今福龍太・西谷修（2009）近代スポーツのミッションは終わったか．平凡社：東京.
井上　俊・亀山佳明編（1999）スポーツ文化を学ぶ人のために．世界思想社：京都.
井上　俊・菊　幸一編著（2012）よくわかるスポーツ文化論．ミネルヴァ書房：京都 , pp.2-5.
菊　幸一（1999）スポーツ文化研究の方法と成果．井上俊・亀山佳明編 , スポーツ文化を学ぶ人のために．世界思想社：京都 , pp.299-320.
菊　幸一・清水　諭・中澤　眞・松村和則編著（2006）現在スポーツのパースペクティブ．大修館書店：東京.
国士舘大学体育・スポーツ科学学会（2002）21 世紀のスポーツを考える．国士舘大学：東京 , pp.34-64.
Leonard Ⅱ , W.M.（1998）A sociological perspective of sport. Allyn and Bacon：Needham Heights, pp.51-138.
Marcus, B.H., Ranowski, W., and Rossi, J.S.（1992）Assessing motivational readiness and decision making for exercise. Health Psychol.,11:257-261.
南田勝也・辻　泉編著（2010）文化社会学の視座．ミネルヴァ書房：京都.
三井宏隆・篠田潤子（2004）スポーツ・テレビ・ファンの心理学．ナカニシヤ出版：京都.
文部科学省（2008）中学校学習指導要領・保健体育.
文部科学省（2009）高等学校学習指導要領･保健体育.
文部科学省(2010)スポーツ立国戦略－スポーツコミュニティ・ニッポン－.
永島惇正（2008）スポーツを文化として定着させるために～これまでの検討を踏まえて～．スポーツ振興に関する特別委員会 , 第 12 回配布資料.
中村敏雄（2000）「サッカーは文化である」について．現代スポーツ評論 ,2:1-5.
日本スポーツ心理学会編（2004）スポーツ心理学．大修館書店：東京 , pp.109-128.
日本体育学会編集（2009）人間とスポーツ・運動の価値を再構築する．体育の科学 , 59(11):716-748.
岡　浩一郎（2000）行動変容のトランスセオレティカル・モデルに基づく運動アドヒレンス研究の動向．体育学研究 , 45：543-561.
岡　浩一郎・平井　啓・堤　俊彦（2003）中年者における身体不活動を規定する心理的要因－運動に関する意思決定のバランス－．行動医学研究 , 9:23-30.
Reed, G.R.（2001）Adherence to exercise and the transtheoretical model of behavior Change. In：Bull, S.J.（Eds.）Adherence issues in sport & exercise.John Wiley & Sons, Ltd：New York, pp.19-45.
Ryba, T.V., Schinke, r.j., and Tenenbaum, G.（Eds.）The cultural turn in sport Psychology. Fitness Information Technology, Inc.：Morgantown.
佐伯聰夫（1984）スポーツの文化．菅原禮編著 , スポーツ社会学の基礎理論．不昧堂出版：東京 , pp.67-98.
佐伯年詩雄（2006）現代スポーツを読む：スポーツ考現学の試み．世界思想社：京都.
佐伯年詩雄（2013）スポーツ文化論の思想と実践～楽しい体育からスポーツ宣言日本まで～．日本スポーツ社会学会編 , 21 世紀のスポーツ社会学. 創文企画：東京 , pp.254-261.
坂野雄二・前田基成編著（2002）セルフ・エフィカシーの臨床心理学．北大路書房：京都 , pp.2-11.
笹川スポーツ財団（2010）スポーツライフ・データ 2010：スポーツライフに関する調査報告書．pp.22-31,40-45.
佐藤健二･吉見俊哉編（2009）文化の社会学．有斐閣：東京.
澤野雅彦 (2005) 企業スポーツの栄光と挫折．青弓社：東京 , pp.47-49.
Schinke, R.J. and Hanrahan, S.（Eds.）（2009）Cultural sport psychology:From theory to practice. Human kinetics：Champaign.
清水　諭（1999）スポーツ文化研究の方法と成果．井上俊・亀山佳明編 , スポーツ文化を学ぶ人のために．世界思想社：京都 , pp.321-340.
清水紀宏（2011）提言「スポーツ振興基本計画 2010」．体育の科学 ,61(1):27-33.
下仲順子編(2012)老年心理学[改訂版]．培風館:東京 , pp.89-121.
杉原 隆編著(2011)生涯スポーツの心理学．福村出版：東京 , pp.67-222.
杉本厚夫編（1997）スポーツファンの社会学．世界思想社：京都.
高橋豪仁（2011）スポーツ応援文化の社会学．世界思想社：京都 .

徳永幹雄（2004）体育・スポーツの心理尺度．不昧堂出版：東京 , 22-197.

友添秀則（2003）スポーツ文化の創造に向けて－今，何が求められているか－．日本体育学会大会号，54:27.

豊田秀樹編（1998）共分散構造分析［事例編］．北大路書房：京都 , pp.1-209.

山本嘉一郎・小野寺孝義（1999）Amos による共分散構造分析と解析事例．ナカニシヤ出　版：京都，pp.16-22.

Weinberg, R.S. and Gould, D.（2007）Foundations of sport ans exerciser psychology. Human Kinetics：Champaign, pp.415-446.

Weiss, M.R.（2004）Developmental sport and exercise psychology：A lifespan perspective. Fitness Information Technology, Inc.：Morgantown, pp.313-502.